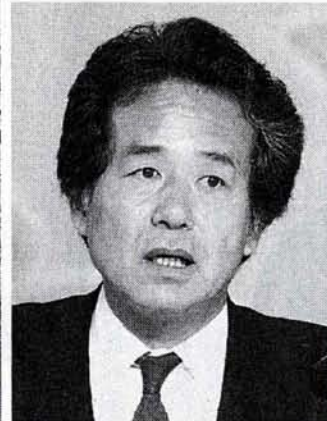


歴史守る地域の知恵

石見銀山の経験

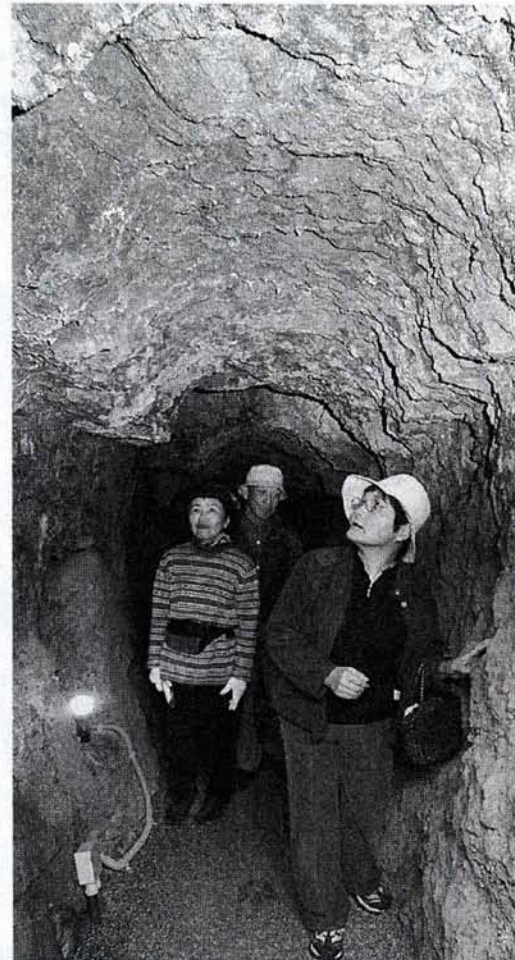
世界遺産や文化遺産を官民協働でどう守っていくか。そのためには何が大事なのか。世界遺産に登録されたばかりの石見銀山(島根県大田市)の例を見ながら考えてみたい。

東京大学教授
西村 幸夫氏



世界遺産や文化遺産を官民協働でどう守っていくか。そのためには何が大事なのか。世界遺産に登録されたばかりの石見銀山(島根県大田市)の例を見ながら考えてみたい。

にしむら・ゆきお 1952年生まれ。東京大学大学院修了。東大助教授を経て、96年から現職。国土審議会特別委員、文化審議会専門委員、同世界遺産特別委員会委員を務める。専門は都市計画、都市保全計画、市民主体のまちづくり論。前ICOMOS副会長。

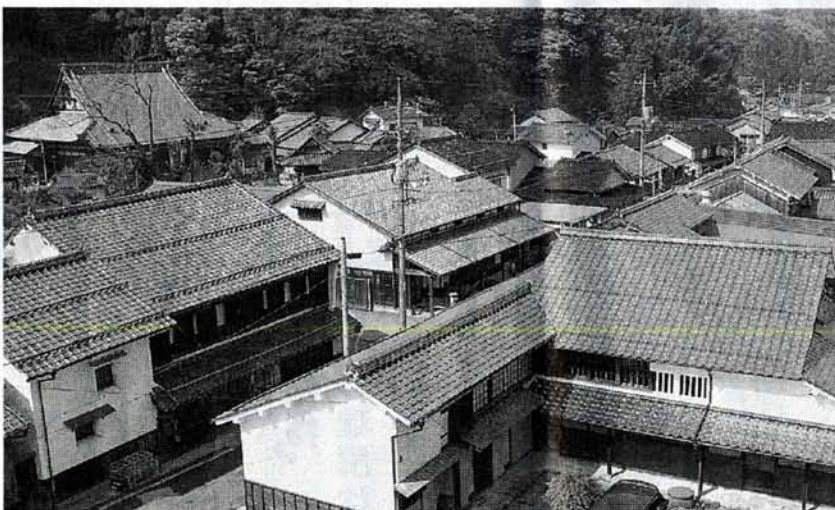


客が車で押し寄せれば、暮らしが破壊されるかもしれないという理由だった。しかも大森では二十年近く前から、面白いまちづくりの運動が続いていた。夫の地元に戻ってきた夫婦が手作りの木綿製品を売る店を開いたのが始まりだった。小さな店の中は魅力的な空間になっていて、田舎の味わいを生かした商品がプロデュースし、年間十万人を超える人が訪れるようになった。

保存と活用両立 住民ら対話重ね

彼らは世界遺産の名を借りて大勢の人を呼ぶ必要はないと考えた。一方で地域の誇りになるとして登録をめぐす人たちが多かった。

石見銀山の龍源寺間歩を歩く観光客(島根県大田市) 写真上。商家や武家の旧宅などが残る大田市大森町の町並み(島根県) 写真左



実際、世界遺産に向けて物事は動き出していた。反対派も、反対を叫び続けるのではなく、世界遺産登録後にどうするかを現実的に考える必要に迫られた。

反対派と賛成派の葛藤は、保存と地域資源の活用をどう均衡させるかということであり、まさにまちづくりの問題だった。そこで大田市では、官民協働でこの問題に対処することにして、二〇〇五年に「石見銀山協働会議」を発足させた。公募で集まった二百人の「市民プランナー」たちが、「石見銀山のめざすべき姿」について一年がかりで話し合った。四つの分科会に分かれて繰り広げた議論は、延べ七十七回にも及んだ。室内での議論にとどまらず、現場も重視した。まちを再発見しようと、地元の語り部に案内してもらったり、人が通らなくなった街道を歩いたりした。地域に民間で駐車場を造るのはやめよう、観光客を案内するボランティア・ガ

イドを育てよう、遺跡地の草刈りが必要……。様々なアイデアが出て、昨年「石見銀山行動計画」がまとまった。

石見銀山の人たちが真剣に将来を考えた背景には、白川郷(岐阜県)の合掌造り集落を視察した経験があった。世界遺産になった白川郷は駐車場や土産物店で農地がつぶされ、休日には交通渋滞も起きている。白川郷の住民たちによる改革も、遅々として前に進まない。例えば、車の進入を止めて外側の駐車場利用に限定すると人の流れが変わる。人の来なくなる土産物店が出てくる。小さな集落の内輪で利害が衝突し、話はなかなか進まない。視察した石見銀山の人たちは学んでいた。ありきたりのものでなく、ほかでは買えない品物を売っている土産物店なら、人の流れの変化にも左右されないはずだ、と。

学んだのはそれだけではない。駐車場をやるには、麦わら帽子一つあればいいといわれる。一台来たら五百円取れる。例えば、豆腐を作って売っていた人が駐車場経営を始めたら、手間も原価もかかる豆腐作りに戻れるだろうか。世界遺産になって、突然そこに経済が依存するようになったら、なかなか元には戻らない。石見銀山の人たちは、そうなる前に皆が協力してルールを作ろうとしたわけだ。世界遺産登録に向けた宣伝活動に力を入れる地域は数多くあった。しかし、登録後にどうなるかまでを考えて、官民協力して活動してきたのは石見銀山が初めてだろう。こうした取り組みが各地で起きることを期待したい。